

経済環境常任委員会 行政視察報告

経済環境常任委員会では、高崎市、気仙沼市を行政視察しました。
概要は以下のとおりです。

- (実施時期) 令和 5年 5月 23日～令和 5年 5月 25日
(実施都市) 高崎市、気仙沼市
(視察内容) 高崎市：耕作放棄地への取組について、森林経営管理制度について
気仙沼市：道の駅「大谷海岸」について

〔高崎市〕

【耕作放棄地への取組について】

高崎市においては、平成24年より人・農地プランの作成を進めてきており、令和2年度までに高崎市の29プランの全てについて実質化を達成している状況となっている。

また、年々増加する荒廃農地を解消するため、荒廃農地等を再生活用し、規模の拡大を目指す農業者のための市単独事業の補助金を創設している。

田・畑の規模拡大を目指す方へ、①荒廃農地の解消に要する経費（木の伐採・伐根、草の刈払・地下茎の除却、深耕・整地等を行い農地を再生する取組に対する補助）や②荒廃農地等の再整備や農業生産に必要とされる施設・設備・機械の導入に係る経費（農業生産用のトラクター等の導入や荒廃農地を整備するために使うバックホー等の導入経費に対する補助（①の取組に対し加算））を補助しているほか、果樹園の規模拡大を目指す方へ①荒廃農地の解消に要する経費（木の伐採・伐根、草の刈払・地下茎の除却、深耕・整地等を行い農地を再生する取組に対する補助）や②荒廃農地等の再整備や農業生産に必要とされる施設・設備・機械の導入に係る経費（生産に必要な多目的防災網等の整備や荒廃果樹園の整備に必要なバックホー等の導入経費に対する補助（①の取組に対し加算））を補助している。

【森林経営管理制度について】

森林環境譲与税の活用方針については、高崎市を代表する観光スポットの一つである観音山丘陵において、身近なハイキングコースとして利用されている全長22kmの「高崎自然歩道」と、その周辺の森林や竹林について、令和5年度から9年度までの5カ年で整備する、観音山事業を実施しており、整備内容としては、自然歩道の補修や支障木伐採、案内看板の新設および修理、周辺の森林の間伐や植林、荒廃竹林の伐採や植林、附帯施設の修理や新設などで、事業総額は約3億円となっている。

そのほか、山林が多い倉渕地域にて、農福連携事業で市が整備するメロン水耕栽培施設における冬季の熱源として、木質バイオマスボイラーを導入予定としており、木質バイオマスボイラー導入費用の一部(4,000千円)に譲与税を充当。林地残材などの未活用材を薪として利用する予定となっている。令和6年度の事業開始に向けて現在整備中である。

また、従来制度では対応できない部分について、独自の補助金メニューを作り、更なる森林整備の促進を目指すもので、林業経営における市独自補助金の交付をしている。

委員からは、荒廃農地に対する組織づくりや人づくりへの考え方等の質問が出た。



【高崎市議会にて】

〔気仙沼市〕

震災前、道の駅「大谷海岸」は、「日本一海水浴場に近い駅」として知られたJR気仙沼線大谷海岸駅に併設し、多くの観光客の人気を集めていたが、東日本大震災の津波によって全壊した。

防潮堤や国道整備などの計画については、大谷地区の防潮堤計画、国道45号の復旧・整備、三陸沿岸道路のルート、ICの設置など複数の事業が複雑に絡みあう困難な状況での計画策定となったが、国・県・市は地域住民らが設立した「大谷里海（まち）づくり検討委員会」と検討を重ねて見直しを行い、海水浴場があった砂浜を従来通り維持しつつ、整備を行うために、最終的には当初計画の復旧延長1,000mのうち600mの区間を防潮堤と国道の兼用堤として施工することとなった。

道の駅の再建については、地元や市内商工・観光関係者との対話によりコンセプトを掲げ、市の南の玄関口として地域の産業振興・交流人口の拡大に資する拠点とすることとし、道の駅を核とした本吉エリアを市の観光ゲートウェイにすることで、「気仙沼の産業と観光をPRする場」「交通結節点」「防災の拠点としてさまざまな人々が行き交う場」「賑わい創出の場」の機能を持たせ、観光交流拠点の形成を図ることを目的とした。

道の駅「大谷海岸」では、地元の沿岸漁業者が刺し網漁などで漁獲した魚、養殖ワカメ、牡蠣、ホヤなどが販売されており、漁業所得向上に貢献している。

新鮮な魚介類ということもあり、地元住民をはじめ、来訪者に喜ばれている。提供しているメニューの素材として購入していく地元の飲食店も少なくない。年末に開いている恒例イベント「あわびまつり」は、仙台圏からの来客も多く、賑わいを見せている。

大谷海水浴場を目前に抱えているため、夏場は多くの海水浴客が道の駅に立ち寄り、集客と売り上げの増加につながっている。

東日本大震災の津波で旧道の駅は全壊し、復興事業によって高台への再建を果たしたが、津波注意報（警報）発表時には、市の一時避難所に指定されている道の駅北側の大谷公民館に誘導することにしており、現在、地域住民等とのワークショップを開催し、防災マニュアルの整備に市とともに取り組んでいる。

今後の課題・展開等については、インパクトのある集客施設、かつ市観光の拠点施設を目指し、多面的機能の強化・確立を図っている。市観光の南の玄関口として、主に市外へ向けた宣伝広告を行い、一層の市外からの誘客促進に努めている。

観光客の市内周遊を促進するため、気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館と連携し、両施設で使える割引券を配布し、一定の成果を上げている。映画「すずめの戸締り」の聖地巡礼として訪れるファンが多かったが、今後の新たな誘客策を検討しなければならない。

道の駅が旅の目的地となるような誘引力を持つオリジナル商品の開発、販促物などを充実させ、売上向上と市外からの誘客強化を目指さなければならない。また、冬場は、農産物の出荷が減少するため直売部門への商品が品薄状態になり、商品の陳列確保が課題となる。商品の陳列を確保し、「“オール気仙沼”の品ぞろえ」を目指したい。

委員からは、東日本大震災の前後での集客の変化や夏と冬での人手の変化等の質問が出た。



【大谷公民館（座学）】



【道の駅「大谷海岸」(現地視察)】